國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕上野誠著『万葉文化論』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土佐, 秀里, Tosa, Hidesato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000490

〔書評〕
上野誠著『万葉文化論』

土佐秀里

十年以上昔になるが、上野誠氏の勤務する奈良大学が学会の会場校だったときに、懇親会が菊水楼(きくすいろう)で行われたことは忘れ難い。「西の迎賓館」とまで謳われた奈良屈指の高級旅館が会場でありながら、会費は例年並みでひどく安く、いったいどんな魔法を使ったものやら、不思議に思ったものである。二次会場まで用意されており、それが平宗(ひらそう)だというのも嬉しかった。心尽くしの宴の場で、あるじ設けした当の本人がいちばん寛いでいた姿が印象深い。人をもてなし、楽しませようとする徹底したサービス精神。そのためにも自ら率先して楽しむこと。それはまさしく上野氏の万葉研究そのものである。氏の研究はどこか楽しげで、贅を尽くした饗宴の趣がある。読む者が堅苦しく畏まるのではなく、ともに文学に酔い痴れることを、氏は望んでいるのだろう。

『折口信夫的思考』（平成三十年十二月十日発行。以下「前著」）に続いて矢継ぎ早に公刊された『万葉文化論』（同年十二月三十日発行。以下「本書」）の大冊を手にしたとき私が想い起したのは、あの奈良の一夜であった。九百頁を超える学術研究書でありながら、その価格は信じられぬほどに安い。箱にもカバーにも、子供の落書きのように伸びやかな筆で、奈良の山々の稜線が描かれる。見れば装幀は石川九楊とある。やはり魔法を使ったとしか思えない。

本書の著者上野誠氏が、現代日本を代表する万葉学者であることは改めて言うまでもない。氏が第一人者と目されるのは、優れた研究を積み重ね、専門学界から高い評価を得てきたことに加え、数多くの著書を世に送り出し、創作活動も行い、学界の内外で幅広く活動してきたためである。氏の著書はいずれも、高度に専門的で学術的な内容を有しながら、誰にでもわかるように語りかける。そこには、できるだけ多くの人に万葉集や古典文学の魅力を伝えたいと願う強い思いが込められている。

氏は万葉歌を引用するに際し、ただ本文のみを掲げるのではなく、大胆で自由闊達な「釈義」を掲げる。氏の現代語訳は軽妙で通俗的だが、そこには万葉歌が本来は通俗的で大衆的なも

のであったはずだという認識が示されている。民俗芸能も氏の研究対象であるが、これも本来は研究者のものではなく民衆のものである。氏が自らの研究成果を可能な限り広く発信しよう（ラジオ出演や、新聞等への寄稿や、多数の講演依頼を引き受けることや、出張講義で「授業芸」を披露することや、ＳＮＳの積極的な活用）とするのは、万葉を「本来の姿」に還元し、大衆のもとに戻さなければならないという決意と覚悟の表れなのであろう。

万葉集の表現を民衆の生活文化に照らして理解しようとする方法は、一般に民俗学的研究と呼ばれる。上野氏は、自身の方法に民俗学的研究への志向があることを認めているが、しかし氏の論には、通例の民俗学的研究には収まらない広がりがあり、また従来の研究史とはかなり異質な面が見られることも確かである。むしろ氏の内面には、民俗学に対する愛憎にも似た両義的な感情が伏在しているような気がする。（氏の折口信夫に対する感情にも、そのような二面性があるのだろう。）「万葉集の民俗学的研究」というと、特定の学派（端的に言えば折口学派）が存在し、その学派に帰依するか、あるいはそれを完全に無視するかで研究者を色分けしてきたようなところがある。そうした二項対立を脱し、民俗学的研究の可能性を探りつつも、既存のそれとは違う方向を探究する過程が、『古代日本の文芸空間』（平成九年）以来の上野氏の歩みだと言える。とくに共著書『万葉民俗学を学ぶ人のために』（平成十五年）の公刊は、入門書的な体裁をとりながら、「万葉民俗学」という新たな学問分野の樹立を宣言するものであった。

氏は「万葉歌の民俗学的研究」と「万葉民俗学」とを差異化し、なおかつその相互交渉の可能性も提唱する。この二者の弁別が晩年の櫻井満氏によって示唆されたものであることは本書「緒言」に述べられているが、そのアイディアを継承し発展させるべく、上野氏は「万葉民俗学」の理論化に腐心してきたわけである。そして本書が提起する綜合的・領域横断的・学際的で野心的な「万葉文化論」とは、「万葉民俗学」の発展的課題に他ならない。そのことは本書の「諸言」に詳述されているが、前著の第一章においてもすでに予告されていたところである。

民俗という観点から浩瀚な本書の目次を眺めたとき、とりわけ興味深く目に映るのは、やはり第六章「農と心性の万葉文化論」と第七章「洗濯と掃除の万葉文化論」である。これまで民俗学的研究というと、信仰や呪術、祭祀儀礼の追究に偏る傾向があった。上野氏の論は、もっと生活実感に即した感情の把握である。たとえば第六章第一節「語られる農」では、「仮廬（かりほ）」

「田盧（たぶせ）」といった語が俎上に載せられる。これらの語は、師である櫻井満氏や、さらにその師である高崎正秀氏によって早くに論じられている。しかし上野氏は、櫻井論や高崎論にはあえて言及せず、それら先行する「民俗学的研究」とはかなり異なるアプローチを試みている。櫻井・高崎両氏の論においては、「仮廬」は新嘗の忌み籠りの儀礼と神婚の幻想に結び付けられることになるのだが、上野氏は歌の表現の分析から当時の農業生活の実感へと話を進める。

氏は、農業を扱った第六章の各論において、万葉歌が民俗誌的な記述そのものではなく、言語表現であるという当然の、しかし看過されがちな事実に改めて注意を促す。万葉歌において田を植える、田を作る、稲を刈るといった表現は、「稲作の民俗を記述するために歌われたものではない」。それらは恋情などの「比喩」にすぎない。しかしそれが「表現」として成立するためには、その事象に対する一定の共通理解が前提になければ、その比喩を理解することはできないはずだ、と氏は言う。万葉歌を民俗資料として扱うのではなく、「文学作品」として理解することによってはじめて万葉びとの生活実感が見えてくるという、この考え方が、氏の構想する「万葉民俗学」であり「万葉文化論」だということになろう。

この考え方は掃除や洗濯を採り上げた第七章においても遺憾なく発揮される。とくに第二節「万葉びとの洗濯」は出色の論で、電気洗濯機が普及した現代において完全に忘却された洗濯という屋外重労働の実感を活き活きと描き出す。いまでは想像できぬほどの垢に汚れた衣服の放つ臭気と、それだけに洗い上げたあとの「白さ」に対する感激とを、われわれは氏の筆致を通してありありと感じ取ることができる。第七章では、洗濯や、機織り・裁縫や、掃除を詠み込んだ歌の表現を分析することによって、それらの労働が女性のものであると考えられていたことを氏は明らかにする。そうした生活習慣から共通認識が形成され、歌の表現が類型化される。逆に言えば、表現類型のあるところには共通認識があり、それが当時の生活の反映だということになる。

氏は第六章第一節で「語り」の類型性を話題にするが、ここで特色的なのは、類型性の形成をコミュニケーションの問題として考えているところである。「聞き手」の理解のために「語り」は類型化するというのである。これは言い換えれば表現の共同性の問題だと言ってよい。共同性は村落共同体に固有のものでもなく、作者未詳歌に固有の現象というわけでもない。共同性は身分階層に関わりなく存在する。第七章第四節「万葉びとの

掃除」で採り上げられるのは山上憶良であり、農業に関わる歌は作者未詳歌ばかりではなく、坂上郎女や家持によっても歌われている。「万葉びと」には庶人や下級官人だけではなく、高級官僚や文人貴族も含まれる。

後期万葉の貴族歌人を扱う第二章「律令官人と宴の万葉文化論」や第三章「往来と贈答の万葉文化論」は、農業や家事労働を扱った第六章・第七章とは一見異質なようだが、氏の認識においては連続的である。作者未詳歌の類型性に文学的表現性を見る氏は、漢籍を学んだ文人貴族の「表現」にも、共同性や対話性や娯楽性を見る。第二章では、律令官人の宴席歌における様式性と共同性の具体的な様相が論じられ、第三章では、書簡や歌の贈答におけるコミュニケーションのありかたが論じられる。氏はこれらの章において律令の規定や漢籍の受容などにも細かく目を配っているが、しかしそこで明らかにされてゆくのは、意図的な方言の使用なども含めて、知識人たちと民衆世界との共通性である。そのような観点から官人たちの宴席歌を捉え直してみたとき、重要な特色となるのが「笑い」である。

ことに注目されるのは、堅苦しい印象さえある憶良の歌に「笑い」の要素を読みこんでいく諸論考である。第二章第一節では書殿餞酒歌を「自己戯画の文芸」として読み解き、第三章第四節では好去好来歌を愚者を演じて笑いを取る歌と読み解く。後者は第七章第四節にも直結している。氏は、とかく堅物で朴念仁とされる憶良のイメージを覆し、「お茶目な憶良」像を新たに提示する。憶良の堅物ぶりや子煩悩ぶりの根拠とされてきた罷宴歌も、もちろん宴席で笑いを取るための歌であり、さらに秋の七草の歌までも、氏から見れば笑いの歌だということになる。こうした解釈は、やはり「聞き手」を意識して表現するというコミュニケーションの問題として導き出されたものである。憶良は宴席で「演じて」いるのだと氏は言う。歌の対話性（それは場に対する即応性ということでもある）を重視したとき、歌われている事柄が、歌い手にとって「事実」であるかどうかは問題ではない。歌人の「演技」という視点は、民俗芸能採訪の経験から獲得されたものでもあろう。万葉歌の「笑い」とは、歌の芸能性という問題であり、貴族と民衆という階層差を超える共同性の問題である。

第四章「歌と木簡の万葉文化論」は、これらの論とは異質な題材を扱っているようにも見えるが、やはり上野氏らしい論の展開を示している。木簡のような文字（漢字）の文化は、民俗学が対象としてきた非文字的な心意伝承の世界とは対立的に捉えられがちだが、氏は、歌を木簡に書く行為そのものや、書か

れた歌木簡の使用目的を儀礼行為に求め、文字と民俗とを架橋する。木簡を通して儀礼空間に対する民俗学的想像力が駆使されるが、そこにはやはり数多くの祭祀儀礼を採訪してきた氏の経験と実感が投影されているはずである。氏は木簡を論じても、文字表記の追究に向かうのではなく、その機能の問題に関心を向け、儀礼の有する祝祭性や「にぎわい」の中に歌木簡の役割と意味を見出そうとする。やはりここでも氏の視点と方法が一貫していることがわかる。木簡歌と万葉歌とは異質な面も多い（たとえば「難波津歌」は万葉集には収載されていない）のだが、氏の射程においては、木簡資料も「万葉文化論」の体系に位置づけられることになる。とくに皇后宮仏前唱歌の意味を問い直す第四章第三節・第四節は、歌木簡と万葉集とをつなごうとする試みとして注目される。

他にも、宮都とその景観を論じる第一章、庭園と聖域を論じる第五章、喪葬儀礼と霊魂観を論じる第八章があるが、この三つの章こそ上野氏の早くからの研究テーマであり、「万葉民俗学」の中心をなすものである。本書は、これらの論が核となって、新たなテーマを呼び寄せ、成長発展し、見るような大著となったものである。すなわち本書は、上野誠という研究者の、研究テーマの広がりと深化の過程をそのまま映し出すものであり、「万葉民俗学」から「万葉文化論」への発展的展開の過程と理由を示すものだといえる。そして本書が論争途中の文章（第四章および第三章第四節の「補説」）をも少なからず含むことからすれば、これをもって「万葉文化論」を完成し完結させようというのではなく、「万葉文化論」のさらなる発展と継承とを自らと後進とに呼びかけようとする宣言の書と見るべきなのであろう。

本書が研究史上の金字塔であり、偉業であることは疑いない。だが同時に、本書自体がまさしく一大饗宴というべきものである。この宴は、いつ果てるとも知れない。もちろん憶良のように宴会の中途で席を立つ（ただし一芸を披露しなければいけない）こともできる。しかし宴のあるじは、まだまだ続きがあると誘いかける。各節、各章ごとに次回予告が入るのも、本書の特色のひとつである。強引に袖を捉えたりはしないものの、あるじはなかなか帰してくれそうもないのである。私もまた、ほかひびととしてこの宴を祝福すべく、翁さび、ことほぎを申し上げようとしたのだが、若輩の徒ゆえ翁のもどきにしかならず、苦笑と失笑を招いたのみであった。死罪死罪。

（A５判、九三六頁、ミネルヴァ書房、二〇一八年十二月発行、定価六五〇〇円＋税）